

龔 自 珍 論 (二)

——「宥情」を中心として——

中 村 嘉 弘

自珍は憂愁の深まりから、二十九歳の秋以降、ついに詩作を断った。詩人が憂愁をうたうのは、憂愁を吐露することによって、たとえ束の間であっても、心の慰めを得られるからであろう。しかし自珍にとって詩を作ることは、かえって憂愁を深めることでしかなかった。限らない憂愁からの脱出を願う自珍は、「今誓つて爾の心を空にせん、心滅せば涙も亦滅せん」(「戒詩五章」その二)とうたい、想念をも滅し尽して、文字の世界に生きることを止め、仏道に救いを求めて詩作を断った。「戒詩五章」は、詩人たることを止め、仏者の沈黙を選ぶに当つての宣誓の詩であつた。

憂愁を断ち切り心の安らぎを得るために、戒詩は堅く守られねばならない。しかし堅く誓つたにもかかわらず、翌

道光三年、三十歳の夏には破られてしまふのである。戒詩はなぜ破られたのであろうか。破戒の問題を「宥情」を中心として論じ、あわせて破戒後の詩人について考察したいと思う。

戒詩が破られた直接的な原因は、官途における挫折にあるであらう。すなわち、かれが内閣中書の資格をもって軍機処章京の試を受けて失敗したことである。一介の内閣中書の身では、その意見を政治に反映することは難しい。すでに二度の会試下第の後、自珍は会試を経て翰林院に入る道とは別に、内閣中書から政治の中核である軍機処に入るうとした⁽²⁾。それによつて「衰世」の王朝にあって、みずからの経世済民の意見を政治に反映させようと考えたからであつた。落選の因は、かれの「欹斜諱浪 四坐を震かす」⁽³⁾ 激しい言動が、「群公の瞋るを免がれ難」かつたからであらう。

軍機章京の試に落選したことは、かれにとって大きな衝撃であつたに違いない。落選後、「小游仙詞十五首」が作られ、戒詩の誓いが破られる⁽³⁾。この「小游仙詞十五首」は、游仙詩の体裁を借りて、軍機処および軍機大臣・軍機章京を痛烈に諷刺するものであり、政治の中枢に参加する道を閉ざされたことに対する憤懣が激しく噴き出したものであつた。

しかし破戒の原因は、恐らくこれにとどまらないであらう。自珍の癒されぬ深い憂愁は、国家の危急に対する憂慮や政治の舞台に上り得ないことに對する悲憤など、いわば外的な要因に触発されて生ずるものであると同時に、かれの生來の病的な神経によって生ずるものでもあるからである。かれはみずからの精神の働きを深く省察し分析し、憂愁を生み出す精神の奥底をさぐろうとする。この意識の分析の結果書かれたのが「宥情」の一篇であり、そこには破戒の内的な契機が語られていると思うのである。

「宥情」は「莊子・在宥篇」にもとづいて名づけられた作品で、人間の精神の根源に存在する情について、それがあるがままに発動させようとする立場を表明したものである。

「宥情」がいつ書かれたのかは、明らかではないが、文

中に江沅の名が見えることから、江沅に仏教を学んだ二十九歳以後のものであらう。さらにその内容から推して、戒詩によって憂愁を断ち切ろうとしてできず、戒を破つて再び詩を書き出したころの作品としてよいかと思われる。「禅悦」の境地にいたり得ず、心中に湧き上る想念を再び詩にうたわねばいられた自分をご容認しようとして、この「宥情」の一篇は書かれたものと考えられるのである。

二

「宥情」は、甲乙丙丁戊の五人の問答をふまえ、情を抑制せずあるがままに発動させようと結論する。まず初めに甲の問題提起がある。

甲乙丙丁戊、相い与に言う、甲曰く、此に土有り、其の哀楽に於けるや、沈沈然として、之を言いて厭かざるは、是れ何若ん。

ここに「土」というのは、自珍みずからのことである。

ここに一人の男がいて、哀楽の情において、常に沈沈然として深く憂愁にとらわれていて、それについて語って厭きないのは、いったいどうしたことなのであらうかと、甲が問いを発する。それに答えて乙は、情とはいかなるもので

あるかを説く。

乙曰く、是れ媒嬖の民なり。許慎曰く、情とは、人の陰氣にして欲有る者なり⁴と。聖人は然らず、清明にして疆毅、畔援無く、歌羨無く、其の旦陽の氣を以て、上天に達す。陰氣にして欲有らば、豈に美談ならんや。

乙はいう。甲のいうような「士」は、媒嬖の民、だらしくなく慎しみのない者である。なぜなら許慎がいうように、「情とは陰氣にして欲ある者」であるから、情に溺れ憂愁にとらわれているということは、「媒嬖の民」ということになる。しかし聖人はそうではない。聖人は清明にして疆毅、道にそむいて氣ままに振舞うことなく、貪りうらやむこともなく、「旦陽の氣」をもって天に達するのだ。陰氣にして欲があるならば、聖人のことばはどうしてすぐれたりっぱなものであり得ようか。

丙は、乙の儒教の立場からする情の否定に対して、「西方の志」（仏典）には、欲に三種あつて、「情欲」を上としており、「西方の聖人」（仏陀）はそれを否定していないと反論する。ここでいう「西方の志」あるいは「西方の聖人」のことばが何にもとづくのかは明らかではないが、丙の言は仏教の立場からする情の弁護である。

丙請う之を弁ぜん、西方の志に曰く、欲に三種有り、

情欲を上と為すと、西方の聖人は、情を以て鄙夷と為さず、子の言、是に非ずと。

続いて丁が意見を述べる。乙と丙の二論の否定である。

丁曰く、乙は情を以て欲に隸せしむ。以て夫の哀樂の正しくして欲に非ざる者を処する無く、且つ人の鉄牛・土狗・木寓竜に異なる所以の者、安くにか在る。乙は是に非ず。丙は欲を以て情に隸せしむ。將た使し万物欲有らば、畢く情に詭り、而して情すら且つ穢墟と為り、罪蔽と為る。丙又是に非ず。是を以て之を析言するに如かざるなり。西方の志は、蓋し其の之を析言するに善しと。

丁は、乙は「情とは、陰氣欲有る者」と考えていることに反論して、そのような考え方では、「哀樂の正しくして欲に非ざる者」があることを説明できないし、その上もし「陰氣にして欲ある者」であるからといって人の情を否定してしまえば、人と感情を持たない鉄の牛・泥の犬・木彫りの竜などを区別するものは、いったいどこにあるのであるうかという、乙の見解を否定する。また情と欲との関係について、乙が情を欲に支配されるものとするのに対して、丙が欲を情に支配されるものとするものについても、丁は、もし万物が欲を持っているとするならば、ことごと

く情にもとることになり、その上、情さえも穢れや罪惡の根源となつてしまふので、丙の説は正しくないという。そして問題は、乙と丙がともに情と欲とを不可分のものと考へることにあるとして、情と欲とを分けて考へるのがよく、丙のいうごとく、「西方の志」が情と欲とを分けてゐるのはよいのだと主張する。

さて最後に戊が自説を主張して次のごとくいう。

戊請う之を弁ぜん。曰く、西方の志に又之れ有り、純想は即ち飛び、純情は即ち墜つ（純想即飛、純情即墜）と。是くの若く其れ概して之を訶むるや、情を言うを傳ず。或は貶し或は貶する無く、汝が言皆是に非ず。

この戊の主張にみえる「純想即飛、純情即墜」は、所掲の經典が不明で明確に理解することは難しいが、これは情に対する否定的な見解であろう。これに対して戊は、一概に情を責めて否定しなうなら情について語ることはできないといひ、また、甲に始まる議論についても、情を否定したりしなかつたりするのは正しくないという。この戊の主張は、情が人間にとって肯定も否定もできない存在としてあるのだということを示唆するものである。自珍はこれとふまえて、みづからの精神における情について探究しようとする。

まず自珍は、沈沈として心を襲う「陰氣」の存在について、それは心のどのような病であるかわからぬが、童年のときにまでさかのぼり得るのだと、意識の奥底の探索とその果てに行きついた童年の体験とを語る。

龔子閑居するに、陰氣沈沈として来りて心を襲う。何の病なるかを知らず。以て江沅に諮す。江沅曰く、我嘗て閑居するに、陰氣沈沈として来りて心を襲う。何の病なるかを知らずと。龔子則ち自ら病を其の心に求む。心に脈有り、脈に童年を見る有り。童年母の側に侍するを見る。母を見、一燈熒然たるを見、一硯を見、一几を見、一僕孺を見、一猫を見る。見ることは是くの如く、見已りて、而して吾が病得たり。

突然、沈沈として心を襲う「陰氣」、それによつて起る心の「病」を尋ねて、自珍はみづからの心の奥底に深くわけ入る。やがて「陰氣」に閉された心に、「病」の手がかかるをつかむ。その「脈」をたどるうちに、童年の記憶を探りあてて。母とその側に侍している自分、明るく輝く灯火、灯火の中に次々と硯や机、うばや猫などが浮び上る。そしてそれを見終つた後、「病」に取りつかれるのである。この心の「病」については、前稿で読んだ「冬日小しく病み家書を寄せて作る」に、夕陽の中であめ売りのチャルメラ

を聞くと、心神は呆け、夢にうなされた幼時の体験を語り、「行年壯盛に迫り、此の病恒に相隨う」と述べているように、幼年より壮年におよぶまでかれの心に巣くひ、これを救い難い憂愁に悩ませる「病」であつたのである。⁽⁶⁾

「陰氣」が取りついた病める魂から生み出される文学は、国家の危急や人生の蹉跌にともなう憂愁と重なつて、というよりも、それ以前にすでに憂愁の文学たらしめるを得なかつたというべきであろう。自珍の憂愁は、たしかに国運の衰退や政界の腐敗、才名のわりには遅かつた郷試合格（浙江郷試合格は二十七歳のときであつた）、続く会試での不合格、軍機処入りの不首尾などによつても生じたものであらうが、つきつめていくと、その底には沈沈として心を襲う「陰氣」、それから生ずる心の「病」が存在することを考へねばならない。いわば外的な要因による憂愁だけならば、そもそも戒詩などは起り得ぬ問題であつたというべきであらうか。

「有情」の一文はさらに続けて、自珍が錢枚の長短言を江沅に示して、その読後の感想を聞き、江沅がそれに答へ、また自珍が反問したことを述べる。ここで問題になるのは、心に取りついて離れぬ悲哀の感情である。

龔子又嘗て錢枚の長短言一卷を取り、江沅をして読ま

しむ。沅曰く、異なるかな、其の心朗朗乎として滓無く、以て塵埃を逸れて青天に登る可く、其の声音の瀏然として、秋の玉を撃つが如きを惜しむ。予始め魂魄之に近づきて哀しく、之に遠ざかりて益ます哀しく、或は之に沈む莫からんとするも、若くは或は之に墜つ。龔子又内に自ら鞫ぶるや、状は何如んと。

江沅は、自珍によつて示された錢枚の長短言を読んでその感想を語る。江沅はこれを読むと、心は朗朗として澄みわたり、塵埃を遠く離れて青天に登るようであり、その声音は瀏亮として秋の玉を撃つごとく清澄である、しかし清朗の中に悲哀が湧き起つて魂をとらえて離さないのだという。詞の読後の魂の浄化と飛揚感、そして心に湧き上る悲哀を語る江沅は、逆に自珍の感想を尋ねる。自珍はそれに対して、再び童子のときの体験を語るのである。

曰く、予童たりし時、塾を逃れて母に就きし時、一燈熒然として、一硯一几ありし時、一爐に依り一猫を抱きし時、一切の境未だ起きざりし時、一切の哀樂未だ中らざりし時、一切の語言未だ造らざりし時、彼の時に當りて、亦嘗て陰氣沈沈として来りて心を襲う。如今閑居せる時、是くの如く鞫べ已れば、則ち知らず、此の方の聖人訶むる所か、西方の聖人訶むる所か、甲乙丙丁戊の五

氏は、孰か我に党するか、孰か我を詬るかを。姑らく自ら宥して、以て夫の之を覆鞫する者を待たん。宥情を作る。

自珍は心の「脈」を尋ねて、塾を逃れて母の膝下にいたときの幼年の自分に立ち返る。「一切の境未だ起きざりし時」とは、五官の機能がまだ働かない時ということであり、「一切の哀樂未だ中らざりし時」とは、一切の感情がまだ「一切の境」に対応して起きてはいない時ということである。「一切の語言未だ造らざりし時」とは、感覚や感情を表現することばが、まだ意識にのぼらない時ということである。このような状態、すなわち感覚や感情が心に生ずる以前、またそれを表現することばを持つ以前の無意識の状態にあって、「陰氣」は沈沈として心にとりつくのである。とすれば、その「陰氣」なるものは、外界の何物かに触発されて生ずるものではなく、人間の存在の根源にあるものということになるであろう。みずからの存在の根源にある「陰氣」は、人間として存在する以上、肯定も否定もならず、ただあるがままに認めざるを得ない。かくて自珍は「陰氣」から生ずる情を、しばらくは容認しようとするのである。

ここで自珍のいうところの情は、喜怒哀樂のすべてを包

括するものではない。かれの宥したところの情は、悲哀の情である。「宥情」の一篇は、沈沈として心を襲う「陰氣」から生れる悲哀の情は容認すべきもののかどうか、またそれを容認することの結果として、憂愁の中に呻吟することやむを得ないのかどうか、という深刻な問題意識によって支えられているのである。

自珍は「陰氣」から生れる悲哀の情を「姑らく自ら宥」そうとした。そうである以上、憂愁からの離脱を願って始められた戒詩は、もはや意味を持たない。かくて自珍は戒を破り、再び憂愁の中に呻吟し、詩人として「文字の海に飄零」することになるのである。「宥情」の一篇は、「戒詩五章」が戒詩の宣言であるのに対して、破戒宣言と意義づけらるる作品だと考えられるのである。

三

ここで破戒後の詩についてみてみよう。政治に対する諷刺の詩には、「小游仙詞十五首」のほか、食糧の騰貴についてうたう「餽飭謡」（三十一歳の作）などがある。また、京師におけるかれの立場が、決して平穩なものではなかったことも詩にうたわれている。「十月廿夜、大いに風ふきて寐ねず、起きて懷を書す」（三十一歳の作）には、みずか

らの言動が「貴人」に「飛語を下」される原因となり、「群公の瞋るを免がれ難」いものであるとうたっている。自珍の忌憚のない言動が、いかに要路の者との摩擦を生み、「名高くして謗作る」ものであったかを想像させるのである。

貴人 一夕下飛語 貴人 一夕飛語を下す

絶似風伯驕無垠 絶だ似たり 風伯の驕りて垠り無きに平生進退兩顛簸 平生 進退兩つながら顛簸す

詰屈内訟知縁因 詰屈 内に訟めて縁因を知る

側身天地本孤絶 身を天地に側めて本より孤絶す

矧乃氣悍心肝淳 矧んや乃ち氣悍に心肝淳なるをや

欹斜譁浪震四坐 欹斜譁浪 四坐を震かす

卽此難免群公瞋 卽ち此れ群公の瞋るを免がれ難し

名高謗作勿自例 名高くして謗作るを自ら例とする勿れ

願以自訟上慰平生親 願くは自ら訟むるを以て上平生の

親を慰めん

さらにまた、やがてアヘン戦争にいたる、広東における外国勢力の圧力に対して、深い憂慮を詩にうたう。「南に帰る者を送る」(三十一歳の作)には、政治的に無力な自分を「布衣」と呼んで「東華」の情勢を哀しみ、一方では帰隱の願いもままならぬことを嘆いている。

布衣三十上書回 布衣三十上書して回る⁽⁸⁾

揮手東華事可哀 手を揮えば東華 事哀しむ可し

且買青山且軒臥 且つ青山を買い且つ軒臥せんとするも

料無富貴逼人來 料るに富貴の人に逼り来る無し

政治の場における無力や貴顕との軋轢とによって、この

ころの自珍は政治の場からの逃避を強く願っている。破戒

後の長篇詩「能く公をして少年ならしむ^{うた}行」(能令公少年

行)は、「小游仙詞十五首」などに見られる憤懣の対極に

強い帰隱の願望があったことを示している。序に「龔子自

から禱祈の言う所なり。遂ぐる能わずと雖も、酒酣なわに

して之を歌えば、以て魂を怡はし顔を沢やかにす可し」と

いうこの詩は、太湖帰隱の願望をうたうもので、憂愁の詩

人の隠居の夢想がきわめて優美にうたわれている。詩は七

十句を超えるので、末尾の一段のみを示そう。

歸來料理書燈紅 帰り来りて料理すれば書燈紅く

茶煙欲散顏鬢濃 茶煙散ぜんと欲して顔鬢濃やかなり

秋肌出鉤涼瓏鬆 秋肌 鉤を出せば 涼 瓏鬆たり

夢不墮少年煩惱叢 夢に墮ちず 少年煩惱の叢に

東僧西僧一杵鐘 東僧西僧 一たび鐘を杵けば

披衣起展華嚴簡 衣を披て起ちて展ぶ 華嚴の簡

噫噉少年萬恨填心胸 噫噉 少年の万恨 心胸を填む

消災解難疇之功 災を消し難を解くは疇が功なる
吉祥解脫文殊童 吉祥解脫は文殊の童

著我五十三參中 我を五十三參中に著かしむ

蓮邦縱使緣未通 蓮邦 縱使^{たと}緣未だ通ぜざるも

他生且生兜率天 他生 且らく生れん 兜率天

この一段は、湖上泛舟の楽しみのあとの、隱居での生活を夢想するもので、「華嚴經・入法界品」の善財童子の修業譚をふまえて、仏道修業によって今生では蓮邦淨土の往生はできないとしても、来世では弥勒菩薩の兜率天に生れたいものだという仏者としての祈願がうたわれている。

また同じく三十歳のときの「寥落」には、「青山」に帰隱する夢もかなわず、「青史」に名を残すような功も立てられず、乾隆の盛時を夢に見ることが多いと、次のようにうたっている。

寥落吾徒可奈何 寥落たり 吾が徒奈何んす可き

青山青史兩蹉跎 青山青史 両つながら蹉跎たり

乾隆朝士不相識 乾隆の朝士 相識らず

無故飛揚入夢多 故無く飛揚して夢に入ること多し

「青山青史 両つながら蹉跎」たるとき、憂愁から逃れ出る道は、仏道の修業による心の平安しかない。「陳碩甫に束し、并びに其れと約して帰安の姚先生を訪れんとす」

(三十歳の作) 三首のその三には

進退兩無依 進退両つながら依る無し

悲來恐速老 悲しみ來りて速かに老いんことを恐る

愁魂中夜馳 愁魂 中夜に馳す

不如起爲道 起ちて道を為すに如かず

とうたっている。

しかし仏道の修業によって心の安らぎは得られたであろうか。この歳の「冬日小しく病み家書を寄せて作る」にも

今年遠離別 今年遠く離別し

獨坐天之涯 独り天の涯に坐す

神理日不足 神理 日に足らず

禪悅詎可期 禪悅 詎ぞ期す可けんや

沈沈復悄悄 沈沈 復た悄悄

擁衾思投誰 衾を擁して誰に投ぜんかと思ふ

とあるごとく、憂愁の深まりによる心の病は深くなっていたようである。

四

憂愁からの解放を願って仏法に皈依し、詩作を断った自珍は、戒を破って再び詩作の世界に立ち返った。それは何よりも詩人としての想念を断ち切ることができなかったか

らである。かれは「能令公少年行」に

逃禪一意皈宗風 逃禪一意 宗風に皈す

情哉幽情麗想銷難空 情しいかな 幽情麗想 銷さんと

して空しくし難し

とうたっている。また、三十二歳のとき江沅に与えた手紙の中で「顧みて語言を毀み、文字を簡にし、中年の心力を省かんとするも、外境迭ごも至り、如えば風 水を吹けば、万態皆有り、皆文章を成す、水何ぞ之を容拒せんや」(「江居士に与える箋」)といっている。心中の「幽情麗想」とは詩人としての想念であり、それを断ち切れぬ以上、風吹いて波立つ水のごとき心を容認し、詩人として表現の世界に立ちもどらないわけにはいかなかったのである。しかし詩作する心は憂愁に満ちたものであり、詩作によって魂の慰藉を得られるというようなものではない。かれの憂愁はくり返しているが、外的要因にも依るものではあるが、しかしより根本的にはかれの病的な心の状態に発するからである。幼時に発する「心疾」「心病」の巣くう精神の生み出す「幽情麗想」は、常に憂愁の世界のものである。出口のない憂愁に閉された心について、自珍は「忍の華を哀しむ」(「哀忍之華」)で次のように述べている。

植有り、天地の間に在り、以て名づく能わず、強いて

之に名づけて忍と曰う。是れ能く華さくも香は外に出でず、氤氲沈沈として、以て其の根に返る。之が為に哀しみて曰く、

雲よ霞よ、天女の憐れむ所にして、之を人間に投ぜり。飄揺として、悲風颺る。慘怛として、陰氣戕う。心魂を凄ましめ、鬱たり塊たり、又孔だ之れ颯たり、何を以てか之を寵せん。棘は十重なり、春には莖を抽くを得ず、夏には妍を殞し、塞りて以て盤ぐる。毒は霾霾として、蛇虺の蟠まる所なり。心は苦しくとも、以て伝う可からず。材孔だ清らかにして、性孔だ靈なるも、怛として以て名づく可からず。此の樹を哀しむ、久しく汝が香を悶す毋れ。行きて而が郷に帰れ、雲霞の楽しみ長からん。

天上から人間に投ぜられ、強いて「忍」と名づけられたこの樹は、「能く華さくも香は外に出でず、氤氲沈沈として、以て其の根に返る」しかない。この悲しい樹こそ「慘怛として陰氣戕」なうところの自珍の心そのものである。この賦は、解き放ちようもなく憂愁に閉された自珍の心のありようを、まことによく語っている。「禅悦」の境地に到り得ず、情すなわち悲哀の情を宥し、再び詩作を始めた自珍を待つものは、さらなる閉された憂愁の世界であっ

た。

五

自珍は三十二歳のとき、旧作や近作の詞をまとめて「無著詞」「懷人館詞」「影事詞」「小奢摩詞」の四詞集一百三首を刊行するが、それに付せられた「長短言自序」には、再び「情」について、次のように述べている。

情の物為るや、亦た嘗て之を鋤かんとするに意有り。之を鋤かんとして能わず、而して反つて之を宥す。之を宥して已まず、而して反つて之を尊ぶ。龔子の長短言を為るは何為る者ぞ。……疇昔の年、凡そ予の声音の妙を求むること蓋し是くの如し。是れ情を尊ばんと欲する者に非ずや。且つ惟だ其れ之を尊び、是を以て「宥情」の書一通を為る。且つ惟だ其れ之を宥し、是れを以て十五年之を鋤かんとして卒に克わざりき。

この一文で自珍は、情を抑制し消し尽そうとしてできず、「宥情」はやがて「尊情」へと進んだと告白している。情の問題は、文中に「十五年之を鋤かんとして卒に克わざりき」とあるように、十九歳のとき、「倚声填詞」すなわち詞の制作を始めて以来の問題であった。かつて外祖父段玉裁が、詞の創作は「愈よ工なれば、道を去ること愈よ遠

く」なるものであるとして、自珍の詞の創作に危惧の念を抱いたのは、自珍が詞の創作にともなう、しだいに深く情に沈溺して行き、それが経史の学問の妨げになると考えたからであった。

しかし「陰気」から生れる悲哀は消し尽しようもなく自珍を捉え、憂愁する魂は限りなく憂愁を生んでいったのである。その憂愁からの離脱を図って始められた戒詩も、わずかの間に破られたのは、情が人間の存在の根源にあるものである以上、除くことはできず、それがあるがままに認めざるを得ないからであった。さらに情を宥して再び詩作の世界に立ちもどるということは、「尊情」以外の何ものでもないのである。三十二歳のこの年は、「尊情」から「情」への自覚が明確になされたという意味で、重要な節目に当たっている。

「長短言自序」は、詞集の序であり、詞の制作に関連して書かれたものであるが、この序でいう情の問題は、単に詞の制作にかかわるものと狭く限定すべきものではない。伝統的な文学観によれば、截然と区分できるものではないにしても、詩は「言志」の文学であり、詞は情の文学である。しかし自珍は「宥情」の一文でも明らかなように、情の問題を精神の根本にかかわる問題としており、戒詩は詞

の制作をも含んでいるからである。三十六歳のときの再度の戒詩の宣言である「破戒草に跋す」には、「余年を以て詩を編し、歳名を閲すること十有八」というが、「十有八」とは、十九歳の「倚声填詞」以来をいっているのであつて、戒詩が詞の制作を含むことは明らかである。

「尊情」の方向を明確にしたこの年、詩あるいは詞にうたわれるのは、やはり広東のアヘンをめぐる情勢についての憂慮やみずからが何事も成し得ぬ焦燥である。

絶域従軍計惘然 絶域 従軍 計惘然たり

東南幽恨滿詞箋 東南の幽恨 詞箋に滿つ

一簫一劍平生意 一簫一劍 平生の意

負盡狂名十五年 狂名に負き尽くす 十五年

〔慢感〕

沈沈心事北南東 沈沈たる心事 北南東

一睨人材海內空 一睨すれば人材 海內空し

〔夜坐〕その二

平生有恨 平生 恨み有り

自酸酸楚楚 自ら酸酸楚楚

十五年來夢中緒 十五年來 夢中の緒

〔洞仙歌〕

沈思十五年中事 沈思す 十五年中の事

才也縱橫 才も也た縱橫

淚也縱橫 淚も也た縱橫

双負蕭心與劍名 双つながら負く 蕭心と劍名とに

〔醜奴兒令〕

六

戒詩は憂愁を断ち切り、心の平安を得るために始められた。その戒を破り仏者の沈黙から詩人として表現の世界へ立ちもどるということは、再び憂愁に身を沈めることを意味する。戒詩から「宥情」による破戒にいたる過程の中で、自珍は詩人として憂愁のうちに生きねばならない自己の運命について、自覚を新たにしている。三十二歳のときの詩「飄零行 戯れに二客に呈す」その二に次のようにうたっている。

臣將請帝之息壤 臣將に帝の息壤を請わんとするに

慚愧飄零未有期 慚愧す 飄零未だ期有らざるを

萬一飄零文字海 万一 文字の海に飄零せば

他生重定定倉詩 他生 重ねて定めん 定倉詩

上帝に「息壤」を請い退隱せんとしたが、いまだその願いもかなわない。退隱もかなわず、もし万一、詩人として「文字の海に飄零」して世を終るならば、輪廻によって他

生にいたっても、詩人として必ず前世で書いた詩を重ねて編集することになるだろう。

この詩は、「戯れに」作られたものではあるが、詩人としておのれの運命に対する深い自覚が表明されている。詩人として憂愁のうちに「文字の海を飄零」することは、自珍に負わされた業ともいふべきものであった。

憂愁のうちに「文字の海に飄零」する自珍に、三十二歳の七月、大きな不幸が襲った。母の死がそれである。「冬日小しく病み家書を寄せて作る」にも見えるごとく、自珍は母に対して甘美ともいふべき懷いを抱き続けており、その死は自珍にとって大きな悲しみであった。三十六歳の「元日懷を書す」には、母の在世の時とそれ以後では世界が全く異ってしまったと次のごとくうたっている。

癸秋以前爲一天 癸秋以前 一天為り

癸秋以後爲一天 癸秋以後 一天為り

天亦無母之日月 天も亦母無きの日月

地亦無母之山川 地も亦母無きの山川

孰贏孰紉孰付予 孰か贏^ち孰か紉^ち孰か付予する

如奔如雷如流泉 奔る如く雷の如く流泉の如し

從茲若到歲七十 茲より若し歲七十に到らば

是別慈親卅九年 是れ慈親に別れて卅九年なり¹⁰⁾

自珍の悲歎の深さをまことによく示した詩であろう。

自珍は父（蘇松太兵備道台）の任地である上海で世を去った母の遺骸を奉じて、故郷杭州に帰り喪に服した。喪中の二十七月か月、自珍は詩を作らない。母の死に遭い詩作を断った自珍は、更に深く信仰の世界に入って行く。三十三歳のときには、「円覚経略疏」¹²⁾の刊行に淨財を喜捨しているが、その願文（「助刊円覚経略疏願文」）には、みずからを仏弟子といい、「円覚経略疏」刊行の功德をもって亡き母に回向し、夙業頓消して淨土往生をすることを願い、やがて命終えた後には母と妻と三人、蓮邦淨土で会おうと述べている。

服喪の間、深く仏教に帰依していた自珍は、信仰の世界に入り得て心安らいだであらうか。三十四歳、喪があけて再び詩作を始めた自珍を待つものは、母の死によってさらに深まった憂愁の世界であった。そして憂愁からの解脱を願って再び詩作を断つのである。再度の戒詩は、自珍三十六歳のときのことであった。

〔注〕

（1）吳昌綏「定盦先生年譜」に「嘉慶二十四年己卯、二十八歳。春、恩科の会試に應じて、售^ういられず、京師に留まる。」

「嘉慶二十五年庚辰、二十九歳。会試仍お下第、筮仕して内閣

中書を得たり。」とある。

(2) 軍機処の職について自珍は「千祿新書自序」(道光十四年、四十三歳の作)に次のように述べている。「三試(会試覆試・殿試・朝考の三試をさす)皆高列ならば、乃ち翰林院の官を授けらる。本朝の宰輔は、必ず翰林院の官に由る。卿貳及び封圻の大臣も、翰林に由る者大半なり。其れ翰林官に非ざれば、軍機処に値るを以て榮選と為す。軍機処の職は、軍事有れば則ち上を佐けて籌を運らし勝を決し、事無ければ則ち祖宗の掌故を顧問するに備え、以て内命を出す者なり。」

(3) 吳昌綬「定盦先生年譜」に「夏、軍機章京を考するも、未だ録せられず、小遊僊十五首を賦し、遂に戒を破り詩を作る」という。

(4) 「説文」卷十下。

(5) 「詩・大雅・皇矣」の「帝 文王に謂う、然く畔援すること無く、然く歆羨すること無く」をふまえる。

(6) 悲哀にとらえられ、憂愁に閉された病的な状態が幼年に始まることは、他にも述べられている。たとえば「戒將帰文」には「予幼くして厥の心疾に違ひ、吉祥に背いて誓に馳す」といい、「戒詩五章」その一には「蚤年心疾に擧えられ、詩境人の知る無し」とある。また「心病」の語は「又識心一首」にも「心薬心霊総て心病、寓言決して燈に就きて焼かんと欲す」と見える。

(7) 吳昌綬「定盦先生年譜」二十九歳の条に紀年文として「東南番舶を罷むの議」(佚文)が挙げられているが、この詩にい

う「上書」とは、あるいはこれを指すか。

(8) 帰隱の志については「癸未六月二日」(道光三年、三十二歳)の日付のある「江居士に与える箋」にも、次のようにいう。「重ねて京師に至りて又三年、還山の志、寤寐の間に温縈せずんば非ず。然れども此の中に汨没するを願わざるも、政に未だ山有れば便ち去るに易からず、去りて復た出ずれば、則ち天下に笑われん。」

(9) 「哀忍之華」は制作年は不詳だが、末尾に「行きて而が郷に帰れ、雲霞の樂しみ長からん」とあるのを見れば、帰隱の志を抱いた三十歳以降の作品と考えられる。

(10) 詩の自注に「癸未 恃を失う、三十二歳なり、日者 予当に七十一歳なるべしと謂う」とある。

(11) 編年詩の癸未の末尾に「癸未七月より乙酉十月に至るまで、憂に居るを以て詩無し。自ら記す」とある。

(12) 「円覚経略疏」は宗密(七八〇—八四二)の撰した「円覚経」の注釈。「円覚経」は宋代以後の中国仏教で、「維摩経」「首楞嚴経」とともに重んぜられた經典である。

訂正 前稿「龔自珍論(一)」(「中国文化」漢文学会報四四号)七九頁下段一行目に「三十歳」とありますのは、「二十九歳」の誤りです。

(国学院大学)